

# イデオロギーとしてのジャーナリズム

——マス・コミュニケーションのイデオロギー認識のために——

山 本 明

## 一 マス・コミュニケーションとジャーナリズム

資本主義社会におけるマス・コミュニケーションのイデオロギー機能をあきらかにするという問題は、コミュニケーションの一形態としてのマス・コミュニケーションが資本主義社会にどのように照応しあるいは規制されているのか、という角度からはじめられる。

そのためにまずあきらかにしておかねばならないことは、マス・コミュニケーション概念は特定の生産様式にだけ対応するものではないということである。観覚・観念・意識の伝達過程をコミュニケーションとよぶならば、マス・コミュニケーションとは近代産業に対応した機械的手段による大量の伝達過程である。ほんらいコミュニケーションはそれ自身が独立したものでなく、労働過程における協業の一契機であり、現実的には生産過程のそして社会的生産力の一契機である。したがって社会発展段階の区別の指標を生産用具の変遷におくのとおなじように、コミュニケーションの区別の指標は△受け手▽の質・量や伝達範囲ではなくてコミュニケーション手段の変遷におかれねばならない。だから

われわれは、マス・コミュニケーションを「大衆伝達」ではなく「大量伝達過程」<sup>(1)</sup>として理解しよう。「大衆伝達」<sup>(2)</sup>は、「大衆」<sup>(3)</sup>という歴史的に制約された集団概念を指標とすることになって、マス・コミュニケーションを資本主義社会に固有のものとしてしまふ。

ところで、ほんらい社会的生産力の一契機として人間の認識能力をたかめ、協同と組織化を強める契機であるコミュニケーションは、マス・コミュニケーションに発展することによってその機能がいちじるしく高まらなくてはならないのであるが、資本主義社会ではむしろ生産過程外のコミュニケーションとして、イデオロギー的支配過程として存在し、コミュニケーションの本質的形態は疎外されてしまふ。もちろん支配階級のイデオロギー的支配は、マス・コミュニケーションによってだけおこなわれているのではなく、いくつもの社会的コミュニケーションがイデオロギー的支配過程として機能している。しかしマス・コミュニケーションによるイデオロギー的支配形態もそのきわめて重要な一環であることにはまちがいない。そうであるならば、支配階級のイデオロギー的支配の一形態としてのマス・コミュニケーションは、他の支配形態とは、どのようにことなつた特殊な側面をもっているかということをあきらかにする必要がある。もしそうでなければ、マス・コミュニケーション論はイデオロギー論一般に解消してしまふだろう。

資本主義社会でのマス・コミュニケーション形態の主要部分は、新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどのいわゆるジャーナリズムとして存在している。ジャーナリズムとは、定期的に刊行されるコミュニケーション生産物による時事的事件や問題の報道・解説・批判活動を意味しているが、このジャーナリズム活動がマス・コミュニケーションの主要な論理的・歴史的契機である。論理的には、ジャーナリズムはマス・コミュニケーションによって自己を完全に実現することができるのであり、したがって歴史的にはジャーナリズムは当然のことながらマス・コミュニケーションの発展に対応している。<sup>(3)</sup>ジャーナリズムの萌芽は商品交換にもなう情報の交換・収集にみられるが、中世になって商業通信としてのニュース・レターから手書き新聞へと発展して、はじめて自立的な姿をとることができた。こうして自立したジャー

ナリズムは活字印刷という伝達手段の開発によって飛躍的に進歩し、一九世紀末における輪転機の発明は多様な日刊新聞の発行を可能にした。いわゆる「ニュー・ジャーナリズム」の成立はジャーナリズムがマス・コミュニケーションによってその活動をささえる時代がきたことをしめすものでもあった。さらにジャーナリズムを活字メディアから解放したラジオ・テレビ・ジャーナリズムの成立はマス・コミュニケーション手段の革命によってだけ存在することができた。このようにジャーナリズムはマス・コミュニケーションの論理的歴史的契機であるから、ジャーナリズムの本質と機能とをしっかりとつかんでおくことは、マス・コミュニケーションの本質と形態を論じる場合に重要な足がかりとすることができよう。

- (1) 経済上の時代区分は、なにごつくられるかではなく、どのような労働手段を用いて生産されるかによって規定される。「手回し挽臼は諸君に、封建領主を支配者とする社会を与え、蒸気挽臼は諸君に、産業資本家を支配者とする社会を与えるであろう」(『哲学の貧困』『ME全集』第四卷一三四頁)。稲葉三千男氏は「コミュニケーション用具によるコミュニケーションの質的分類について次の試案をだしている。I 人的コミュニケーション (1) 身振りコミュニケーション (2) 話しコミュニケーション (3) 活字コミュニケーション II 道具的コミュニケーション (1) シグナル・コミュニケーション (2) 書きコミュニケーション (3) 話しコミュニケーション III 機械的コミュニケーション (1) マルクス主義のマス・コミュニケーション論 (2) 「新聞研究」一九六〇年一月号)。
- (2) 牧瀬恒二氏は「マス・コミュニケーション」という概念を正しく理解しようとしてもしないで、「マス・コミ」といふことばは経済学でいえば、流通だけを問題にして生産を問題にしない立場である。流通を問題にして生産を無視する立場、伝達を主として主体を明かにしない立場、ここに共通したものがあつて、階級を避けて通つていくところに、実ははっきりした階級性がある」(『新聞の論理』二一六頁)といつてゐる。ここには論理的概念に直接的に階級性をみださずにはおれない不毛の思考がある。
- (3) 論理的契機と歴史的契機とは不可分の統一としてとらえねばならない。エム・ローゼンタール『歴史のなものと論理的なもの』(『国際資料』第二九号所収参照)。

## 二 イデオロギー形態としてのジャーナリズム

ジャーナリズム論に精力的にとりくんだ数少ない哲学者の一人である戸坂潤は、ジャーナリズム論に多くの示唆にとん

だ考えをのこしているが、彼は次のように書いている。「ジャーナリズムは常に話題(Topik)に上り得るものでなければならぬ。話題とは凡ゆる部門的な分科的な事物が、言葉という共通な場処(Topos)をめざして集まることを示唆する言葉である。この集まる場処は市場の外ではなく、そこで一切の知識が交換され(ニュース・評判)、訂正綜合され(議論)、また誇張されたり捏造されたりする(虚偽)。かくて常識——ドクサが養成される、神話や輿論が出来上るのである。やがて、ここでまた範疇——これは公衆に向つて語ることを意味する言葉で市場と語原を同じくする——が発生し、論理が構成され、理論が出来上る。これが哲学的世界観に外ならない、哲学は常識のものであり、ジャーナリズムのものである」(「イデオロギー概論」六五～六頁)。ここには戸坂の「思想の科学としての哲学」(「思想の科学」〔戸坂潤選集〕第三卷九六頁)とそれの一環としてのジャーナリズム論とが集中的にあらわれている。<sup>(5)</sup> 思考の形態は交通過程の展開に照応すること、いいかえれば意識・思想はコミュニケーション形態に照応するという戸坂のコミュニケーション論がここに成立している。戸坂のジャーナリズム論における功績は、第一にジャーナリズムをイデオロギー論の課題としたこと、第二にジャーナリズムをイデオロギーの一形態・一契機としてとらえたこと、にあった。

ジャーナリズムが活動であるのは、それが意識・思想など精神的生産の特殊な表現であるからだ。意識・思想が時事を対象として発揚されるときジャーナリズムとなり、それが事物の個別的・一般的法則を追求するときアカデミズムとなる。ジャーナリズムは、すでにおおくの人がのべているようにアカデミズムとの対立物としてかんがえられるが、両者はともに意識形態としてのイデオロギーにはかならない。だからジャーナリズムは、イデオロギー一般の本質的一契機であるとともに交通関係に対応するイデオロギーの現代的一形態である。「ジャーナリズムとは、一方において本質的な——昔から存在した——報道ないし交通関係というイデオロギーの一契機でありながら、同時にそれが、歴史的必然性に従って、今日のいわゆるジャーナリズム(ブルジョア・ジャーナリズム)というイデオロギーの一形態にまで発展してこなければならなかった、その所以を弁証法的に物語る概念なのである」(「戸坂潤「イデオロギー概論」五八頁)。

ジャーナリズムをイデオロギー論としてかんがえてゆくことは、マス・コミュニケーション論に積極的な意味をもっている。それは第一にマス・コミュニケーションのなかにジャーナリズム的契機がどのように貫徹されているか、もしくはどのように歪曲されているかをみることよって、マス・コミュニケーションのイデオロギー性をあきらかにするための一つの物差しを提供してくれる。第二にさきに交通・生産力的見地から生産関係を捨象して規定したジャーナリズム概念に生産関係を導入することよって、特定の生産様式に照応するジャーナリズムの具体的イデオロギー形態をみることができる。

イデオロギーの諸形態の一つとしてジャーナリズムの形態をあきらかにしておくことはけつして無視できない問題である。イデオロギー論において、イデオロギーの形態の側面をおろそかにしてきたことが、諸々のイデオロギー形態の特殊の側面をすべてイデオロギー一般に解消し、さらにそれを生産関係に還元してしまうという硬化した思考をはびこらせてしまった。エンゲルスは死の二年前につきのよりのべている。「吾々兩人（マルクス・エンゲルス）はまず、経済的基礎事実から政治的・法律的その他のイデオロギー的観念によつて媒介された行動をみちびきだすことに重点をおいてきたし、またおかねばならなかつた。そのさい吾々はまた内容的な面を主としたために形式的な面——これらの観念等がいかにしてうまれるか——を等閑にふしてきた。このことがやがて論敵の誤解に絶好の機会をあたえたのであつて、パウ・バルトは、その適例である」〔エンゲルスからレーリングへの手紙〕「一八九三年七月十四日附」『MIE選集第二五卷五三二―三頁〕。このエンゲルスの遺言は充分に執行されているとはいえない。とくに一九三〇年にはじまるデボリン批判と、スターリン的「ソヴェト哲学」はあらゆるイデオロギー的諸関係にかんする科学を、階級的内容の暴露にとどめてしまうという傾向をうみだした。コミュニケーション内容をブルジョワ・イデオロギー一般へと直接的に解消してしまうという本質還元的きめつけが、こんにちのマス・コミュニケーション論を不毛のものにするおおきな原因となっている。この弱点が没イデオロギー的外貌をもっている機能分析的マス・コミュニケーション論への無原則的迎

合や、機能論にたいする不生産的な機械的反撥をもたらす原因となつてゐる。

われわれはイデオロギーのジャーナリズム形態をみるにさいして戸坂からおおくのものをまなびながら、まずジャーナリズムの特性をみてゆこう。第一にジャーナリズム活動は、その日その日の時間的生活に関連しているために（活動の産物は翌日には腐敗してしまふ）、社会的日常生活とつよいむすびつきをもっている。第二にジャーナリズムがとりあげる問題は時事的現実の問題である。第三に以上の二つの特性からジャーナリズムが社会的な実践性・活動性をもっている。この三つがジャーナリズムの特性としてあげられよう。この特性はアクチュアリティ (Actuality, Aktualität) として総合的に表現することができよう。よく知られているようにアクチュアリイは、新聞の本質を規定する古典的概念である。しかしわれわれはイデオロギー論のなかでアクチュアリティを規定しようとしているのだから、その規定が諸々の新聞学者の概念規定とはかけはなれてしまふのはやむをえない。アクチュアリティは戸坂もいうように「歴史の上からは現在性として、存在ないし事実の上からは現実性として、行為の上からは活動性として、生活の上からは社会性として、規定されねばならぬ」(「前掲書」六三頁)。

アクチュアリティこそが、イデオロギーにおけるジャーナリズム形態をかたちづくる本質であつた。ではアクチュアリティはどのような機能を果たすのか。まず第一にジャーナリズムは事物の個別的把握ではなく、むしろエンサイクロペディックな総合性をもつ。第二にアクチュアリティは時事性を重要な一環としていたのであり、時事性は政治をぬきにしてかんがえられず、ジャーナリズムは一見非政治性にみえる内容にも政治性をあたえているのである。第三に政治性はジャーナリズムにおいては批判性とならなければならない。政治性とは、矛盾・対立をぬきにしては考えられない。ジャーナリズムが時事性として政治性をもつということは、ジャーナリズムが独自の政治性をもつて、現実を批判するということである。「ジャーナリズムは、その活動じたいが、現実の状況にたいする問いかけとほたらきかけをおして成立する」(「荒瀬豊『ジャーナリスト』「現代マス・コミュニケーション講座」第三巻八九頁)のだが、そこではたえざる現実

にたいする否定の契機なしにはジャーナリズムは存在理由をうしなってしまう。だから、ジャーナリズムのもつ日常性は報道性に対応するのだが、この報道性は批判性をもたねばならない。ひとつの状況は他の状況と関連・対比され解釈され批判されることによってだけ状況の総合的把握は可能となる。総合性・政治性・批判性こそがジャーナリズムが本来もっているイデオロギー形態である<sup>(8)</sup>。

(4) 戸坂潤のジャーナリズム論は次の論文で展開されている。「イデオロギーの論理学」(一九三二年刊)、「イデオロギー概論」(一九三二年刊)、論文は『新聞の問題』、『新聞現象の分析』、『アカデミーとジャーナリズム』、『批評の問題』、『輿論の考察』(以上「現代のための哲学」一九三三年刊に収録、後に『輿論の考察』をのぞいて「現代哲学講話」一九三四年刊に再収録)、および『本邦新聞の企業形態』について(『読書論』一九三八年刊)などがある。戸坂のジャーナリズム論を現時点の哲学から論じた河邑光夫『戸坂潤の学問論—イデオロギー性と論理性との関係をめぐって』、『名古屋大学文学部十周年記念論集』所収は示唆にとむ、戸坂潤論は数多いが、戸坂のジャーナリズム論はこんにちほとんどかえりみられていない(戦後編集された選集にもジャーナリズム論は一つとして収録されていない)。日本新聞学史に特異な光彩をはなつた彼の仕事は、さらに検討・撰取されるべきではなからうか。

なお、戸坂のジャーナリズム論に触発されて、「唯物論研究会」のメンバーの幾人かがジャーナリズムについてのべている。たとえば梯明秀は『ジャーナリズムとアカデミズム』、『ジャーナリズムの構造』、『新聞的と雑誌的』をはじめ『唯物論研究』、『何を読むべきか』にいくつかの論文をかいている(これらの論文は彼の「物質の哲学的概念」初版に収録されている)。彼は戸坂のジャーナリズム論について、「ジャーナリズムの問題をジャーナリストとして発展せしめず・退いてアカデミケルとしてそれを分析するところに、すなはちジャーナリズムをアカデミズムに投影するところに、氏の理論の極めて暗示的であり、そしてどこまでも唯たんに暗示的であるゆえんがあるのである」(『前掲書』三三八頁)と批判している。戸坂と梯のジャーナリズム論はアカデミズムを半封建性と規定したうえで、ジャーナリズムをより資本主義的なものとして積極的に評価しようとする傾向があった。(ここにはいわず「三三三年テーゼ」的戦略配置の影響がある)。一九三三年末「何を読むべきか」誌の金井論文は梯論文を「観念のなかで勝手に抽象されたブルでもプロでもないジャーナリズム一般から出発して、ジャーナリズムの批判性を論じている」と批判し、さらに「ブルジョア論壇とプロレタリアートの科学哲学分野での活動との根本的差異を消し去ることの如何に危険であるか」を警告して、この期のジャーナリズム論にいささか早急な終止符をうった。

イデオロギーとしてのジャーナリズム

イデオロギーとしてのジャーナリズム

(5) この文章は、ときどき引用されているわりに、充分に理解されているとはいえない。たとえば戸坂のいう「常識」は知識のセツトとしてのいわゆる常識ではなく、「社会的人間が生活に於て活用しつつある政治的社会的文化的な心理の動き方を指す」(『思想の科学』「戸坂潤選集」第三卷九五頁)。

(6) エンゲルスはこの手紙の末尾にこうもかいている。「これはふるくからある話で、はじめはいつも、内容のために形式のほうが等閑にふされたものである。まえにものべたように私もおなじようにそれをやった。そして、私がこのあやまりに気づいたときは、いつもあとの祭であつた」。

(7) 新聞学においてはふるくからアクチュアリティは新聞内容を規定する基本的概念であり、したがつて数多くの新聞学者が概念規定をおこなつた(これらの多種多様な見解は、小野秀雄「新聞原論」のなかの「現実的事実の本質」の章をみられたい)。しかし、これらの諸意見はアクチュアリティをたんに時間性・空間性としてあつかつていないにすぎないのであり、アクチュアリティの疎外された形態をあたかもそれが本質であるかのようのべているだけである。これにはんして戸坂の規定は、アクチュアリティの本質形態と疎外された形態とを区別している点で「諸家の見解」とは異質であり、すぐれている。

(8) ことわつておかねばならないのは、アクチュアリティの本質形態をそなえたジャーナリズムが歴史的に存在したのではないということである。この規定はあくまで論理的抽象である。この点がしばしばあやまつて理解され、ジャーナリズムが單純商品生産であつた時期のジャーナリズム(いわゆる「政論新聞」時代)を無条件に讚美する説があらわれる。だが、この時期のジャーナリズムは、閉鎖的な交通関係とひくい生産力に規定され、さらに、当時のジャーナリストの精神的労働は職人として自己の労働の質に埋没した畸形的労働と自己倒錯から自由ではなかつた。このような条件のもとでは、アクチュアリティは充分な展開をみることはできなかつた。

### 三 資本主義社会のジャーナリズム

アクチュアリティを本質とするジャーナリズムは資本主義社会でどのような形態をあたえられるのか。ここではこれまで捨象されていた生産関係規定を導入することによって、ジャーナリズムと生産関係との相互が規定しあう現実のジャーナリズムを課題としなければならぬ。そのためにまず、資本主義社会のイデオロギーの特徴からはじめよう。



資本主義社会がうみだす諸イデオロギーはどのように規定されるか。人間の生活・実践は意識を媒介としてしか存在しない。だが意識が人間の生活・実践を規定するのではない。意識は、人間が社会的人間であるための客観的存在である人間と自然との関連、および人間相互の物質的關係によって媒介され決定される。「意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定する」(『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫版三三頁)からこそ人間の本質は「社会的諸關係の総和」(『フォイエルバッハにかんするテーゼ』前掲書二三七頁)である。したがって資本主義社会の諸イデオロギーの物質的基礎は生産過程が価値増殖過程としてあらわれる資本主義的生産様式にもとめることができる。だが諸イデオロギーが諸意識形態であるのは、この資本主義的生産様式からうまれる固有の意識を直接的基礎としているのであり、この固有の意識を媒介としてはじめて諸イデオロギーが成立する。だから資本主義的生産様式における労働の疎外が日常的自然発生のにうみだす意識——疎外された意識・日常的幻想——にイデオロギーの現実的基礎がある。

意識の幻想性・虚偽性は第一に社会的分業によって、第二に商品生産によって、第三に国家によってうまれる。まず社会的分業は、物質的労働と精神的労働との分離によってはじめて現実的分業となり、精神的労働は物質的労働から分離し「意識は、現存する実践の意識とはなにか別なものであるかのように、またなにか現実的なものを表象もしないのに現実的なかを表象するかのように現実的に想像しうるようになる」(『ドイツ・イデオロギー』三九頁)。第二に商品社会では労働生産物は商品として生産されるので、私的労働と社会的総労働との關係は人と人との關係としてではなく、物と物との關係として意識される。さらに労働力が商品となる資本主義社会では、この幻想性と虚偽性とは最高段階にたつする。労働の生産力は資本の生産力として意識され人間は生産手段から疎外された抽象的個人としてあらわれる。そのことによってはじめて人間は相互に結合されるのであるが、この結合は貨幣交通という物的形態によって表現され意識される。そして最後に資本主義的生産様式が永久的生産法則であるかのように、また抽象的個人<sup>9)</sup>が人間の本性であるかのように意識される。第三に社会の分裂にもなつて「社会からうまれながら社会のうえにたち、社会にたい

して、ますます外的なものとなってゆく権力」(エンゲルス『家族・私有財産および国家の起源』「M||E選集」第二三卷四七四頁)である国家が幻想をうみだす。国家は支配階級の機関でありながら、あたかも全社会の公的機関であるかのように意識される。国家が∧幻想の共同体V<sup>10</sup>となって、あたかも普遍的利害を追求するかのような幻想がうまれる。ここから階級闘争は政治的原理のための闘争としてさかだちして意識に反映する。

ここにあげた幻想的意識——疎外された意識は資本主義社会において最高の形態をとり、日常的幻想が全社会をおおいい転倒した意識が正常の意識とみなされる。この幻想的意識が觀念として結晶し概念をかたちづくりさらに体系づけられ形態をあたえられて諸イデオロギーとして自立する。イデオロギーは日常的自然発生幻想がその基礎である。<sup>(10)</sup>意識の体系化・意識形態としての諸イデオロギーは、物質的生産様式から発生する幻想を土台としているために、物質的生産関係に反作用しこれに奉仕することができる。ただ幻想的意識および意識形態としてのイデオロギーはそれ自体が矛盾の表現である。なぜなら幻想的意識は労働過程と生産関係の矛盾の結果が反映したものであり、意識は転倒していてもなお労働過程と無縁ではなく、したがってイデオロギーも空中にまいあがりながらもなお現実的土台にはたつきかけることができる。科学的イデオロギーに「真理の粒」がふくまれているのは、イデオロギーも人間労働の対象化を反映することなしには存在することができないからである。<sup>(11)</sup>

資本主義社会をおおう幻想的意識はジャーナリズムの本質にどのように反映するか。ジャーナリズムという精神的生産が資本主義的産業として物質的生産にふざいたものに移行し、精神的労働過程が剰余価値生産過程としてあらわれると、ジャーナリズムは状況との対決による否定の原理の貫徹よりもむしろ主体性の放棄と最大公約数的∧世論V<sup>10</sup>の製造に力をそそぐ。物質的生産が精神的生産を圧殺する。こうしてジャーナリズムは幻想的意識の組織的イデオロギー化の機関とならざるをえない。資本主義社会のジャーナリズムがジャーナリズムの本質を喪失さすのは、たんにそれが商品としてあらわれるからではない。資本主義社会ではジャーナリズム活動が精神的生産にささえられるよりもむしろ物

質的生産を目的とする剰余価値生産過程に変化することによって精神的活動を必要としなくなるからであり、第二にこの精神的活動の放棄は論評の報道化とへ世論へのもたれかかりで代置されるからである。だからジャーナリズムの商品生産化ではなくて資本主義的生産化が当面の問題なのだ。

ジャーナリズムにおける幻想的意識からイデオロギーへの形成過程の主要な条件はなにか。どのような過程でジャーナリズムはイデオロギーとして自立化するのか。送り手は、幻想的意識にもとずいて、諸現象と状況を解釈し等級づけ価値つけてジャーナリズムにくみこんでゆく。この過程は客観的にはある一定の範囲のなかでおこなわれる。まず第一に国家権力・支配階級による直接的なジャーナリズム支配がある。このもつとも露骨な直接的支配は検閲であるが、それとおなじような効果をもつ間接的干渉が支配階級・統治階級によって不断におこなわれるしあるいは権力とジャーナリズムとの意識的結合による民衆の誘導・動員すらもよくみられるものである。これらの干渉や結合が上からのものであるとすれば、第二の条件はいわば下からの制限と、それに名をかりたジャーナリズムの自己規制である。つまり幻想的意識からイデオロギーの自立への無数の可能性は送り手と受け手との函数によって一定の規制をうける。これは受け手と彼らへの効果や影響を認識せずにはコミュニケーションは効力をもたないからだが、この送り手の受け手認識がジャーナリズムのイデオロギーの自立の鍵である。受け手全体が送り手の勝手な行動をしるのではなくて送り手の受け手認識が逆にへ送り手自身をしるるのである。

送り手の受け手認識は世論過程にたいする認識運動としておこなわれ、この認識は世論として定着される。世論過程は資本主義社会における政治的レベルでの形式的平等を基礎として成立した資本主義社会に固有の集団利害の発揚形式である。それは一定の争点にたいする集団的意見の対立と融和の形成過程であり、また世論にない手の感性的認識は、形式的平等のワクのなかでだけ効力をもつことが約束されている形式である。だから世論過程それ自身は感性的認識とより高度な認識への可能性をはらんでもその形式が内容の無限の発展を制限しているという意味で幻想的

イデオロギーの一形態である。だがジャーナリズムの世論過程認識はさらに奇怪である。ジャーナリズムはさきによつて上からの干渉によつて、あるいはジャーナリズム内部の要求によつて、ちやうど漁夫が海中に生けがこいをつくるように任意に動的な世論過程をきりとつて靜的な世論をつくりだす。世論は世論過程からきりはなされて固定化される。

この意味で世論は「半ば自然発生的な、半ば人工的に製造された一つの支配的なイデオロギーに外ならない」(台坂潤『新聞の問題』「現代のための哲学」二二三頁)。ジャーナリズムはこのような世論と関係をもつことによつて受け手にたいする認識とするのである。こうしてつくられた世論をジャーナリズムは世論過程へ逆に放流して、世論過程を一定の方向へ固定化しようとする。世論操作・大衆操作とは世論をテコとする世論過程の操作である。

ジャーナリズムのこのような運動はジャーナリズムの本質であつたアクチュアリティを疑似化してしまふ。アクチュアリティを規定する現在性・現実性・活動性・社会性はすぐれて綜合性・政治性・批判性をもつものであつた。しかしジャーナリズムが精神的生産を放棄することによつてとうぜんのことではあるがアクチュアリティは本来の姿をうしなつてしまふ。なぜならジャーナリズムが無批判にうけいれる幻想的意識は、事物の諸関連を逆立ちさせ、偶然的・無媒介的なものとしてしまひ、立体的構造を平準化してしまふからである。こうしてアクチュアリティの政治性・批判性はせいぜい孤立した諸現象にたいするあれこれの評判になつてしまふ。われわれにとつては批判性こそがジャーナリズムの否定の契機であり、ジャーナリズムがイデオロギーとして自己を主張する根源でもあつた。ジャーナリズムの批判性の喪失は政治性の喪失でもありいいかえればジャーナリズムの本質の喪失にはかならない。したがつて、ジャーナリズムは、批判性を報道性に還元することによつてジャーナリズムがイデオロギーの一契機・一形態であることをみずから欺瞞しようとする。ジャーナリズムは、没イデオロギー的イデオロギーとして幻想的意識のイデオロギー化にとめる。こうして、アクチュアリティの現在性・現実性はその生命である批判性をうしなつてたんに時間的問題・事実的問題への対応となる。ほんらい批判の対象であつた時事問題は、たんに問題のあたりさとしてとらえられる。このよう

に、アクチュアリティが非政治性・時間性・事実性・批判性に形骸化するとき、ジャーナリズムは新奇性・珍奇性・興味性の追求活動となり、また偶然視された諸対象を恣意的に結合し解釈して、批判的ところのみもあらわれる。この非政治性・時間性・事実性・批判性がいろいろな度合いで組合わされることによっていわゆる高級紙(誌)からスポーツ紙(誌)・娯楽紙(誌)がいろいろわけされ、あるいはそれぞれの企業に独自のカラーがつくりだされる。こうして資本主義社会におけるジャーナリズムは、アクチュアリティを疑似的な姿でしかあらわすことができない。イデオロギーの一契機としてのジャーナリズムは資本主義的形態においては資本主義的イデオロギーの一形態として幻想的意識の恒常的体系化の契機、すなわち支配階級の精神的生産とその分配の契機となる。ところで、われわれにとってジャーナリズムはマス・コミュニケーション過程の主要な契機であった。したがってジャーナリズムの資本主義的イデオロギー性は、マス・コミュニケーション過程のイデオロギー性を決定づける。資本主義社会におけるマス・コミュニケーションは、支配階級のイデオロギー支配過程として機能し、さらに民衆自身のコミュニケーションをもイデオロギー的支配過程にくみこもうとする。

(9) 「生産力は個人たちからまったく独立な、ひきさかれたものとして、個人たちとならぶ独自の世界としてあらわれる。……これらの生産力はいわば一つの物的な姿をとっており、個人そのものにとってはもはや個人の力ではなくて私有の力であり、したがって個人が私有者であるかぎりにおいてのみ個人の力であるにすぎない。……そしてこれらからはこれら力はひきさかれ、したがってこれらにはあらゆる現実的な生活内容をうばいさらわれて抽象的な個人になってしまっている」(ドイツ・イデオロギー)一〇一―一二頁)。

(10) イデオロギー論における日常的幻想の重視については、芝田進午「人間性と人格の理論」第十一章・同氏『階級意識の形成』(『唯物論研究』第三号所収)参照。

(11) 「分業と生産力の発展が幻想としてのイデオロギーを形成させたとするれば、同じ分業と生産力の発展が、自然と社会についての科学的研究の発展をもたらし、イデオロギー内部での幻想と真理、幻想的側面と科学的側面、観念論的側面と唯物論的側面の相互浸透、相互対立、相互転化を不可避とさせる」(芝田「前掲書」二九八頁)。このイデオロギー内部の矛盾の側面についてレーニイデオロギーとしてのジャーナリズム

ンは、相対的真理と絶対的真理の関係としてつぎのようになる。「人間の思惟はその本性上、相対的真理の総和から構成される絶対的真理を、われわれにあたえることができるし、またあたえている。科学のおおの発展段階は、絶対的真理というこの総和に新しい粒をつけくわえる。……われわれの知識が客観的・絶対的真理に近づく限度は、歴史的に条件づけられている。しかし、この真理の存在は無条件的であり、われわれがそれに近づきつつあることは無条件的である」（『唯物論と経験批判論』「全集」第一四卷一五六・八頁）。イデオロギーの歴史的制約と現実の反映の側面との関連の把握が、イデオロギー論と認識論との統一的視点となる（この問題については竹内良知『マルクス主義哲学の発展のために』「哲学研究入門」下巻所収）が示唆にとむ。

#### 四 マスコミュニケーションのイデオロギー認識

資本主義社会におけるジャーナリズムが民衆をへ世論として認識するという虚偽性は、ジャーナリズムの没イデオロギー的性格の原因であり、このことがジャーナリズムを支配階級の精神的生産の一環に位置させるものであった。ジャーナリズムの本質の疎外がこのようなかたちで存在することは、受け手にとってはきわめて不利である。疑似的アクチュアリティがあたかもアクチュアリティであるかのように扮装しているジャーナリズムと対面して民衆自身がアクチュアリティを構成しなければならない。この民衆の認識はマス・コミュニケーション論の重要な課題である。マス・コミュニケーションの認識論は「現在を解説して不在に迫り、そして実在をつかむ高度に構想力の要請される困難な行為」（稲畑三千男『現代認識の方法』「人間と歴史」九七〜八頁）だが、このことはさらに「マス・コミュニケーションに対する批判的態度は、内容に対する批判というより、送り手全体への批判にまで深められねばならない」（「前掲書」九九頁）ともいわれる。そうであるとするれば、マス・コミュニケーションの認識論は、まずジャーナリズムの没イデオロギー的イデオロギーをどの角度から認識することができるのかという突破口を指示するものでなくてはならない。そのためにイデオロギー論がうけもつことができる役割は、本質的形態が疎外されている資本主義的ジャーナリズム形態が一つの矛盾

的存在であることを指摘してジャーナリズムにたいする物神崇拜をうちこわすことにあるだろう。

その道すじをたどるためにまずとりかからねばならない作業は、「支配階級の思想が社会的な思想となる」〔ドイツ・イデオロギー 六六頁〕というテーゼのただし理解にある。このテーゼの教条主義的理解がマス・コミニケイションの物神崇拜の原因となつてあらわれている。このテーゼは意識の幻想性と精神的労働の生産・分配という二つの側面の統一として理解されることが必要である。まず第一にこのテーゼはある思想が支配的な思想となることは、とりもなおさず支配階級の思想となるという関係をさしている。「支配的な思想とは支配的な物質的諸関係の観念的な表現、思想としてとらえられた支配的な物質的諸関係にほかならない。したがって、まさしくその一つの階級を支配階級にするところの諸関係の観念的な表現、すなわちこの階級の支配の思想にほかならない」〔前掲書 六六頁〕。いかえれば、支配的な物質的諸関係の観念的な表現が幻想と幻想から自立したイデオロギーであり、さらにその社会の生産力の主要なない手が生産関係における支配者である支配階級としてたちあらわれる、という二つの契機がつかまればならない。こうしてはじめて支配的な思想が物質的諸関係の維持・強化の役割をはたし、そのことよつて支配階級の思想となる。誤解をかえりみずにあえていうならば、支配階級の思想であるがためにその思想が社会的な支配的な思想になるのではなくてむしろその逆である。

第二に以上のことをふまえて支配階級は自己の思想をより一層支配的な思想にするために努力する。支配階級が精神的生産における生産・流通の主要な手段を専有していることは自己の支配のための思想をふりまき、その思想を支配的な思想とするための決定的な条件である。イデオログは彼の認識を發展させ——それは現実の転倒としての幻想的意識ではあるが——意識を体系化し諸々のイデオロギー形態を完成させる。支配階級はこの完成品を彼らの支配する流通機構にのせて全社会へ放流する。これが、支配階級の思想を支配的な思想とする歴史的現実的な条件である。

支配階級の思想はつねに日常的自然発生の幻想を基礎としているのであり、思想と幻想とを分離して前者を批判して

もたえず新しい思想が代置されるにおわつてしまう。このことがわすれられるとジャーナリズムのイデオロギーを批判する場合にも、コピーのなかにこめられた支配階級の意図的イデオロギーをみぬくことだけにおわつてしまい、幻想にもとづく現実の転倒と虚偽意識とが——したがって支配階級の思想が——みすごされがちとなる。

ここで支配階級の意図と支配階級の思想との関連をあきらかにするために、とりあえず支配階級と統治階級との関係にふれておこう。生産関係における支配階級はそのまま国家権力を掌握する政治上の統治階級と一致しない。<sup>(13)</sup> 後者は支配階級内部の分業として存在し、一般的に両者は相互に規定しあう関係にある。

現代の国家独占資本主義段階においては独占資本がプロレタリアートのみならずブルジョワジー一般をも支配し「最大利潤」の獲得をめざすので、独占資本の代理者である統治階級と支配階級とは相互に規定しあいながらも統治階級の主導権の強化にもなつて両者のあいだにいくつかの矛盾がうまれる。このことは統治階級のイデオロギーが支配階級のそれから自立する契機でもある。政治状況に対応した振幅をしめすこの分裂と矛盾はつぎのように分類できる。第一に支配階級のイデオロギーから統治階級のイデオロギーが自立する必要のない場合。この状況は政治的な相対的安定期に対応する。第二は統治階級のイデオロギーが支配階級のイデオロギーを基盤としながらも、なお相対的独自性をもつ場合。それは特殊の利害の追求に最大利潤の追求が従来の方法によつては、もはやその幻想的一般利害の追求というたてまえをつらぬきたいほどに被支配階級の現実的生活の矛盾が存在するときである。

この段階では、統治階級のイデオロギーは形式的平等や近代的自由にさえ敵対する。彼らはあらゆる手段によつて精神的労働の生産と分配とを規制し、彼らのイデオロギーは意識的虚偽と偽瞞の専門家となる。ジャーナリズムの内容に統治階級のイデオロギーがもりこまれるとき、もはや批判の契機は消滅して宣伝だけがジャーナリズムの課題となる近代的イデオロギーの特性であつた多様性・個性性さえも一つの方向に集中され、ジャーナリズムは個別的カラーをもうしなう。ジャーナリズムは統治階級が「ありうべき世論」と考へる方向に世論過程を動員する機関となり、人口的に製



造された世論がジャーナリズムをにぎわす。このような状況はナチ・ドイツや戦前の日本のような典型的独裁国家にみられるだけでなく、多かれ少なかれわれわれの現実でもあるのだ。

こうした状況のなかで受け手はどのようにコピーを認識すれば「実在」にたどりつくのか。受け手はコピーのなかにこめられた統治階層のイデオロギーを排除し、さらに幻想的意識によって逆立ちしている虚像から支配階級そのものをみださなければならぬ。この認識過程の途中でたちどまってしまえば、支配階級は統治階層の後にかくれてしまい、支配階級は政治家個人としてしか認識することができなくなる。認識過程が幻想的意識のヴェールをはぎとるところまで到達することは容易でない。

けれどもジャーナリズムが世論を媒介としているという虚偽性は、受け手のただしい認識成立の可能性をもあたえている。受け手は世論過程を直視し、コピーが反映する世論を検証することによって、コピーの内容と現実との矛盾を感性的にしろみぬくことはきわめて困難ではあるが可能でもあるだろう。コピーの内容が検証不可能の場合でも他の回路でおくられるコピーとの対比によって、あるいは長期的な観察によって、あるときは、過去のコピーによる送り手の「信用調査」によって、コピーの真偽をすることはできる。この認識過程は、ハヤカワのいう「地図」の修正である。そして意味論者は現地どおりの地図をつくりあげることその努力をやめてしまう。だが、われわれにとって地図の修正はむしろより高度な認識への出発準備にすぎない。われわれは現地を直接することなしに現地をおおう幻想をとりはらわなければならない。この作業はもはやコピーの批判をのりこえて認識主体の確立と被支配階級による精神的生産と分配への着手によってなされる。送り手になりたい受動的な受け手という立場ではなく、むしろ彼が主体とならねばならない。それは認識主体が自己の幻想的意識と対決し、自己をのりこえるというかたちをとるだろう。ここではじめてわれわれは、コピーのなかに送り手全体を、支配階級をみることができる。したがって、マス・コミュニケーション認識論は、コピーと受け手との関連だけを課題とするのでは不十分である。コピーにたいする凝視が、コピーが代表し

ている社会と認識主体との関連にまでたどりつく認識構造が課題とならなければならない。

このようなマス・コミュニケーション認識は可能だろうか。「どのように独占資本がマス・コミュニケーションの間接性の構造を複雑化させようとも、そしてそこに虚偽のイデオロギーをつくり出そうとも、その間接性をつくり出す土台そのものに、オリジナルとしての人間の生活、労働過程がある。そしてこの労働過程そのものの中にあらわれる矛盾は、いたるところでその間接性をやぶる可能性をもっている」(梅本克巳『マルクス主義哲学における修正と発展』「現代のイデオロギ―」一八五頁)といわれるが、その可能性とは何か。まず第一に階級社会における幻想的意識は、資本主義社会において最高の形態をとるのであるが、このことは同時に資本主義社会においてのみ幻想的意識の廃絶の契機が存在するという資本主義生産にねざす矛盾である。資本主義的生産様式は「社会的労働の無限の生産力を強制的につくりだすための不可避的な通過点」であり、「このような生産力だけが自由な人間社会の物質的基礎を形成することができる」(マルクス『直接的生産過程の諸結果』「マルクス・エンゲルス選集」第九卷三七八頁)という意味で生産力の全面的発達のための土台を準備している。第二にこの資本主義的生産様式は職人的労働とはことなつて労働者から労働の質をうしなわせた。このことは、資本主義的マス・コミュニケーションが大量の受動的な受け手 $\checkmark$ をもつことができた基本的な条件でもあった。<sup>(15)</sup>労働は質をうしなうことによつて生産手段と結びつくことができるし、また、他の労働と結合することができる。「中世の協業では質が協同をもとめた、現代では量が結合をもとめている」(藤本進治「認識論」二〇〇頁)。この巨大な労働は、生産手段から疎外されているので、強制によつてしか生産力となりえないし、またそれさえも個人主義的な利潤のためのものである。であるから労働の「この偉大な内容は個人主義的な形式と対立し矛盾することによつてしか、現実とその力を発揮することができない。それは自分を否定しないでは実存できないのである」(藤本「前掲書」二〇一頁)。人間が抽象的人間 $\checkmark$ となつたことによる、労働のこの内容と形式の矛盾は、労働の自由な組織的な力を無限に発展させる可能性をはらんでいる。労働は個人主義的な制限から脱することによつて、すなわち自発的な集団的結合をもつこ

とによって労働の本来の力をとりもどすことができる。だから資本主義社会における労働者の団結は幻想的意識に制約されない意識の全面的発達を可能とする契機となるだろう。諸個人の意識は集団のなかで実践と結合し、意識の発達を保証され、同時にそのことが個人的なワクをこえたより高度な集団的・組織的認識をうみだす。<sup>(12)</sup>意識の全面的発達＝理性的認識は、むしろ集団的組織的認識によってだけ可能である。集団的組織的認識によってはじめて△受け手▽という受動性は、認識主体という能動性へと転化することができる。

マス・コミュニケーションのイデオロギー認識は、認識主体を△受け手▽から解放させることによってだけ可能である。<sup>(13)</sup>だからまた、マス・コミュニケーションの認識論は△受け手▽の認識論にとどまってはならず、むしろ受け手への受け手▽からの脱却の契機の探究と、被支配階級による精神的生産と分配のための集団的組織的認識論とを、その課題としなければならない。この課題の遂行のために、マス・コミュニケーションにおける硬化した教条的イデオロギー論からの脱却は大きな役割をえんじらるだろう。なぜなら、教条的イデオロギー論を基礎としていては、認識論とイデオロギー論との統一的把握など不可能だからだ。現在のマス・コミュニケーション論にとってまず必要なことは、マス・コミュニケーションのイデオロギー性をたたく把握しなおすことにある。そのためには、意識の幻想性・虚偽性と労働過程との矛盾に照明をあてながら、ジャーナリズムのイデオロギー形態をあきらかにする必要がある。このようなプロセスがマス・コミュニケーション論における、イデオロギー論と認識論との統一的把握を保証する。ここではじめてマス・コミュニケーション論は「現実的な実証的な科学」(ドイツ・イデオロギー「三三頁」)となることができよう。

- (12) 被支配階級が支配階級の思想にくみこまれるのは、被支配階級が精神的生産に必要な手段と時間的余裕をもたないからだ、ということがしばしば強調される。しかし、この説があげている理由は、一つの条件ではあるけれども、それが主要な原因ではない。
- (13) 近代における統治階層と支配階級との関係は、一九世紀におけるイギリスのトリー、ホイッグと土地貴族・産業ブルジョワ

- との関係に典型的にみることができ。前芝確三編「近代政治社会史」一一二頁参照。
- (14) 「マス・コミュニケーションは社会的人口の『マス化』をはかる、とよくいわれるが、じじつはその逆であって、バラバラな

人間たちがジャーナリズムを要求したのである。あるいは、バラバラな人間たちに対応したコミュニケーション・スタイルが、ジャーナリズムという形式に結実したのである。経済的には、したがって、ジャーナリズムは産業、社会のものである。政治的には、それは近代国家のものである」(桑原武夫他『ジャーナリズムの思想的役割』「近代日本思想史講座」第五卷一五一頁)。この指摘は的をえている。ただバラバラな人間が生産外的コミュニケーションによる結びつきをもとめたとき、それが彼らを受動的受け手に固定化したという論理の欠如をのぞいては。

(15) レーニンの「イスクラ」刊行は、集団的組織的認識への意識的とりくみであった。『なにをなすべきか』はこのことをくわしくのべている。なお、藤本進治「認識論」第三部は「意識の理性的段階への転化」にふれて学ぶところきわめて多い。

(16) 稲葉三千男氏の『現代認識の方法』(「人間の研究」所収)にたいして山田宗睦氏は「マス・コミのおくり手・うけ手の回路で、現代認識の方法をさぐることは、同君の、『社会的象徴論』のころみにもかわらず、不可能だとおもわれる」(『現代認識論』二七三頁)とのべ、つづいて「精神的生産が精神的交通によって規整される構造、ないしは、コミュニケーションの規整によって現代思想をとこうとする方策は、すべて、支配階級の思想分配に、くみするものである」(『前掲書』二七三―四頁)と主張している。この山田氏の意見はそれ自身ただし。けれども、稲葉氏が受け手の認識について次のようにのべていることにも注意したい。「この(認識の)操作は、ディルタイ流の追体験とは当然のことながら根本的に異なる。ディルタイにあつては自己移入である。(中略)社会的象徴論のばあいは、あくまでも他者を、その生産過程の内に置いてみる。自己は、他者を包んだ過程の外に身を置いて、過程の全体を客観視している」(『前掲書』九六頁)。右の傍線部分は、マルクスのフォイエルバッハにかんするテーゼの第一節とも対応して、さらに精密な発展が必要ではなからうか。認識主体が「過程の外に身を置」くという「客観視」の条件が実践との関連でとらえられねばならない。この作業によって「社会的象徴論」は送り手・受け手の回路に制限されない認識論となることができるだろう。

(17) 「ドイツ・イデオロギー」六六頁および山田宗睦「前掲書」参照。

1962.5.17.